2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会　概要

6月9日（日）

13:55〜15:20　　公募フォーラム・公募ワークショップ

【第1室】（公募フォーラム）

小中連携のための音声を基軸とした英語指導の必要性と実践

吉田 晴世（大阪教育大学）
加賀田 哲也（大阪教育大学）
衣笠 知子（園田学園女子大学）
鄭 京淑（大阪教育大学・非常勤講師）

新学習指導要領（中学校）では，小学校段階での外国語活動を通じて，音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成されることを踏まえ，指導内容の改善を図るとされている。また，新たに「発音と綴りを関連付けて指導する」という項目が追記されている。このような現状を受けて，小中連携のもと，音声面の指導を中心に積極的に外国語活動が行われている事例も数多く報告されており，中学校においても4技能を統合したコミュニケーション能力育成を目指した授業が多く見られつつある。

しかし，一方で中学校入門期に「聞くこと」，「話すこと」に積極的な生徒も「読むこと」，「書くこと」に消極的になったり，抵抗を示したりする傾向が強い。それゆえ，中学校入門期には，小学校で培った「聞くこと，話すこと」を効果的に「読むこと，書くこと」へと繋げる方法が求められている。

そこで，学習初期段階からフォニックス（文字と音声の関係を表すルール）指導と並行して，サイトワード指導を導入することで，学習者の総合的な英語力の向上を期待することができる。サイトワードとは，どのパッセージにおいても「共通して，かつ頻繁に目にする基本的な語」であり，その多くがフォニックスでは説明できないものが含まれている。

小学校でサイトワードや様々のアクティビティを通して慣れ親しんだ語彙について，中学入門期にフォニックスの知識を利用しながら，書記素ー音素の変換法則を身につけさせて，既習単語の綴りを覚える手がかりを持つことは生徒たちに安心感を与え，英語を自分の力で読むことができるようになり，自律学習者への育成へとつながる。

本フォーラムでは，１）入門期における音声を基軸とした英語指導の必要性，２）小学校におけるサイトワード導入の意義，外国語活動教材 “Hi, friends！”と関連付けたフォニックスベースによる指導の有用性と実践，３）チャンツや歌による音声指導の効果と活用事例，４）中学校における気づきを促すフォニックス指導の必要性および，検定教科書を用いたフォニックス・ワークシートの活用例，を取り上げる。その後，フロアと本テーマについて討論を行いたい。

6月9日（日）

13:55〜15:20　　公募フォーラム・公募ワークショップ

【第2室】（公募ワークショップ）

Performing communication: invitation to improv
ーコミュニケーションをパフォームする:即興への誘いー

三野宮 春子（神戸市外国語大学）

“Improvisation” is NOT just about ex-press-ing (bringing out what already exists inside) your thoughts or feelings “without preparation” or “on the spot”. It is also about the dynamic way people interact with their here-and-now environment fully; in so doing, they spontaneously and collaboratively CREATE MEANINGS.

The contributions that improv, as well as other forms of drama, makes in education have long been recognized in European and North American countries. In Japan, too, improv is making a huge impact these days among business people who wish to improve their CREATIVITY, INTERPERSONAL SKILLS, and PERFORMANCE. Why not we, foreign language educators take advantage of this powerful teaching / learning tool? In improv work, participants learn to be open to whatever is happening there, and respond spontaneously using their minds, hearts, and bodies in a holistic manner. In this particular workshop, I would like to invite all participants to investigate the intersection of improv and communication through THE IMPROV-REFLECTION CYCLE.

The prevailing view of language or communication in our modern academic society tends to focus solely on the aspect of information processing (e.g. input, output, automatisation, etc.). However, this workshop aims to provide an opportunity to perform, feel, and think about the TOTALITY or WHOLENESS of human communication in which our MIND, HEART, and BODY work inseparably. This totality is beyond the reach of modern scientific techniques; consequently, it is scarcely discussed, as if it were a taboo. Improv, I believe, can help release EFL education from its fixed point of view.

I have offered improv-based workshops and classes to various groups of high school students, college students, and in-service teachers, and witnessed a number of amazing outcomes. The participants were enthusiastically involved, and reported that they found the collaborative meaning-making activities ENLIGHTENING, as well as ENJOYABLE. All EFL teachers, teacher trainers, researchers, and others in the related fields are invited to this workshop. As improv activities are experiential in nature, full participation is expected. Please be advised to dress DOWN properly so that you can move about comfortably. No acting experience or no special talent is required. The workshop is conducted mostly in English, but other languages are not prohibited. As long as you are interested in EFL communication and open to new experiences, we will surely contribute to each other’s learning and have a good time together.

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会　概要

6月9日（日）

13:55〜15:20　　公募フォーラム・公募ワークショップ

【第3室】（公募ワークショップ）

教科書コミュニケーション英語 I を用いて英語で行う授業

溝畑 保之（大阪府立学校指導教諭）
有光 裕美（大阪府立寝屋川高等学校）
高橋 昌由（大阪府立園芸高等学校）
平尾 一成（大阪府立寝屋川高等学校）
松村 淳一（大阪府立富田林高等学校）
森田 琢也（大阪府立とりかい高等支援学校）

小中の英語教育改革を受け，平成25年4月より「英語で行うことを基本とする」高校英語授業が始まっている。また，TOEFLを大学受験の資格にする動きもある。大阪府高等学校英語教育研究会では，平成24年度の例会で4技能統合型の授業の在り方を探り，コミュニケーション英語I新教科書の検討を行ってきている。教科書には，紙面からの日本語の排除，効果的な視覚補助や英語の説明による語彙理解などの編著者の工夫が見られる。しかし，「導入のリスニング活動が生徒のレベルに合っていない」，「本文が難しすぎる」，「ほとんどの英問が事実確認である」，「アウトプット活動が本文内容から離れている」ものもある。そのため，教科書通りの指導では，英語による授業が進まない心配がある。期待される授業では，大学入試対策への効果を高め，生涯学習としての英語教育を目指したい。具体的には，まとまりのある英語を聞いたり読んだりするときに，的確に話者や書き手の意図をつかみ，英語を使うことに臆せず積極的にのぞめる生徒の育成にあたりたい。そのために，第2言語習得理論からは，Present, Comprehend, Practice, Produce（PCPP）の過程が推奨されている。大きな枠組みとしてラウンド制で計画し，発問の工夫を行うと効果的な授業ができること研究部会の検討で明らかとなってきている。本ワークショップでは，本研究会研究部会で取り上げた具体的指導例をワークショップ形式で紹介するとともに，英語で進める授業を成功へ導くための次の5つの指針について説明する。

1 クラスルーム・イングリシュを活用しよう
2 オーラル・インタラクションに挑戦しよう
3 ラウンド制，概念地図・発問の工夫で内容理解を深めよう
4 目的を明確にした音読で定着を図ろう
5 アウトプット活動を設定しよう

さらに，周りの教員と具体的な授業プランを共有し協調し，ペア・小グループ活動の協同学習を利用する方法も紹介し，4月以降の実践や生徒の反応にも言及する。